

ああ ひめゆり部隊（2）

世界戦史空前の鉄火を浴びせられた沖縄戦場で、ひめゆり部隊は任務を崇高に遂行し、二百十九人が神となつていった。彼女たちの誇るシンボル「ひめゆり」のように清純に。神去つたその六月を祈念し、同窓会は本年六月ようやく墓碑銘を捧げることができた。ここに女子師範の部から三編を。礼深くして。

上原幸子（十八歳）——六月十八日解散命令後山城の丘で学友八人といっしょになつた。砲弾の飛び交う中で幸子は「早く自決しよう」と主張した。「手榴弾二発では九人は死ねない」「いや、真ん中におけば自決できる」。話がまとまらず、さ迷っているところを捕虜になつた。その後、常にそのことを後悔し、「自分たちの受けた教育は何だったのか」と嘆いていた。病院に収容されたがとうとう帰らぬ人となつてしまつた。

平安名貞子（十七歳）——二十二日米兵に見つかり日本兵が射殺された。平安名、大城が「私たちは皇国女性だ、早く殺せ……」と叫んでいた。直後銃声が聞こえた。日

が暮れてから上原が様子を見にいったら、二人は顔を射貫かれていた。両手を組み乱れた姿はなく、寝ているようだった。

大湾敏子（十九歳）——第三外科壕で食糧調達や水汲み、伝令などの厳しい日日を学友たちと励まし合い……。しかし兵隊の命令でも一般住民の食糧を奪うことはできなかつた。そのため兵隊になぐられ学友と共に無念の涙を流した。「私の両親も兵隊に食糧を奪われているかと思うと、どうしてもとれない」と話していた。六月十九日壕に撃ち込まれたガス弾で教師学友四十六人と共に死亡した。

そのころの日本の女子師範は、貧家の出であっても、抜群の努力家か才媛の群れ集う学園だった。同じころ、私は雪国の女子師範の教師だった。（『墓碑銘』那覇市安里・ひめゆり同窓会・千円）

（一九八九年九月八日）